日本語版社会集団アタッチメント尺度作成の試み
Constructing a Japanese Version of the Social Group Attachment Scale

塚瀬　将之 TSUKASE, Masayuki
● 国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科
Graduate School of Arts and Sciences, International Christian University

西村　馨 NISHIMURA, Kaoru
● 国際基督教大学
International Christian University

Keywords アタッチメント理論，日本語版社会集団アタッチメント尺度，アタッチメント不安，アタッチメント回避
attachment theory, Japanese version of the Social Group Attachment Scale, attachment anxiety, attachment avoidance

ABSTRACT

本研究では，Smithらが開発した社会集団アタッチメント尺度（SGAS）の日本語版作成を試みた。大学生172名（男性63名，女性109名）を対象として調査を行った結果，20項目を選定し，日本語版社会集団アタッチメント尺度（SGAS-J）とした。因子分析から「アタッチメント不安」と「アタッチメント回避」の2因子が抽出され，SGASと同様の構造をなしていることが確認された。また2つの下位尺度は高い信頼性を示した。集団同一視尺度（GIS）と「アタッチメント不安」下位尺度との間には弱い負の相関が，また「アタッチメント回避」下位尺度との間には中程度の負の相関が示され，併存的妥当性が示された。また，愛着機能尺度（AFS）との相関の検討から，親密な個人の持つ愛着機能との弁別的妥当性が示された。「アタッチメント回避」下位尺度とAFSの「安全基地」下位尺度との間に弱い負の相関が示され，危機状況でのアタッチメント対象の選択に特徴があることが示唆された。

This study aims to construct a Japanese version of the Social Group Attachment Scale (SGAS) developed by Smith et al. A survey was conducted among 172 university students (63 males and 109 females). 20 items were selected as

validated for the Japanese version of SGAS (SGAS-J). By factor analysis, two factors such as "attachment anxiety" and "attachment avoidance" were extracted and confirmed as having similar structure with SGAS. The two subscales showed high reliability. The SGAS-J showed concurrent validity since the "attachment anxiety" subscale showed a weakly negative correlation with Group Identification Scale and the "attachment avoidant" subscale showed a moderate correlation with it. By examining the correlations with the Attachment Function Scale, SGAS-J showed discriminant validity. The implication is that it is different from attachment function from the most intimate person.

1．問題と目的

心理臨床の現場において個人と集団の相克は常に重要な問題であったが，近年，「居場所」が見つけられない事例が多くなるなど，その深刻の度を増してきている。人は，集団の中でどのように安全感を体験したり，妨げられたりするのであろうか。またそれは生涯にわたる発達の中でどのような展開，変化を遂げるのであろうか。

Bowlby（1973, 1980, 1982）のアタッチメント理論[1]は，この30年以上の間に，親密な対人関係や精神病理に関する理論および実証研究に対して莫大な影響をもたらしてきた。心理療法諸派に共通する治療要因として関係性が注目を集める中（Norcross, 2002），アタッチメントはその重要な説明理論にもなっている（Meyer & Pilkonis, 2002）。筆者らの心的安全空間の概念や理論（e.g. 小谷, 2008）を展開するためにも，アタッチメント理論とその実証研究手法を取り入れていくことは意味があると考えられる。

本研究はアタッチメント測定への貢献の試みである。Bowlby理論の詳細は他に譲り，ここではその実証研究の流れをごく簡単に概観する。

Ainsworth et al.（1978）は，有名なストレンジシチュエーション法（Strange Situation Procedure: SSP）を用いて，アタッチメントの3類型，回避型，安定型，抵抗－アンビヴァレント型を見出した（Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978）。その後，この3類型に当てはまりにくい子どもたちの詳細な研究を通して，無秩序・無方向型が提唱されるようになり（Main & Solomon, 1990），現在ではこの4類型が用いられることが多い。

その後，成人のアタッチメントへの関心が高まり，Main & Goldwyn（1984）はアダルトアタッチメントインタビュー（Adult Attachment Interview: AAI）を開発した。これは親から受けた養育の内容とそれに対する評価を問う半構造化された面接法で，内容のみならず形式も含めた点から評価される。Ainsworthらの考えを拡張して成人に適用しようとしており，乳幼児の４タイプに対応した４タイプ（自律型，アタッチメント軽視型，とらわれ型，未解決型）に類型化される。

成人のアタッチメントに関するもうひとつの流れは，質問紙法による測定である。Hazan & Shaver（1987）はアタッチメントスタイル質問紙（Attachment Style Questionnaires）を開発し，他者一般や恋愛対象に対するアタッチメントをとらえようとした。これは，成人の他者に対する態度に関して，SSPの３タイプの記述から一つを強制選択させるものである。わが国でも，詫摩・戸田（1987）がいち早くこの手法を取り入れ，検討を行った。これらの研究は，成人においても乳幼児期と同様なアタッチメントのスタイルが存在していることを見出し，乳幼児期との連続性，変化可能性，多元性，すなわちさまざまな対象へのアタッチメントを同時に持っていることに関する多くの研究を生み出す契機となった。

その後，類型論的なとらえ方の限界を補うために，2次元的モデルがBartholomewら（Bartholomew, 1990; Bartholomew & Horowitz, 1991）によって開発された。これは，２つの評価的次元，すなわち自己と他者の次元からなり，それぞれを肯定的／否定的で区別することで先述の４タイプに対応した４つのカテゴリーを提供するものである。これによって，４タイプは，異なるが質的に連続したものとして位置づけられるようになった。統計

手法を強調する研究者たち（Fraly & Waller, 1998; Brennan, Clark, & Shaver, 1998）はこの視点をさらに展開し，類型には根拠がなく，「不安」と「回避」の2次元空間で表現できるものだと考えるに至っている。カテゴリーの妥当性には議論の余地があろうが，さまざまな対象へのアタッチメントを2次元でとらえる枠組みと根拠を与えた功績は大きい。

Collins & Read（1994）やBaldwin et al.（1996）は，人は接近可能性において異なり，過去の個人的関係で体験したり想像したりしたさまざまなアタッチメントのパターンを反映する多元的な精神モデルを有するのだと主張した。Smith et al.（1999）はそれらの主張を受け，アタッチメント理論をグループ関係に拡張した。すなわち，人はグループメンバーとしての自分自身のモデルや，それとともに，グループの一員であることについての考え，情緒，行動に影響を与えるグループのモデルを持つと考えたのである。そして，先のBrennan et al.（1998）の指摘を踏まえ，このグループへのアタッチメントを「アタッチメント不安」と「回避」の2次元でとらえようとした。彼らは，Collins & Read（1990）のアタッチメント尺度とBartholomew & Horowitz（1991）のアタッチメントスタイル自己報告質問紙（初版）から項目を抽出して恋愛パートナーアタッチメント尺度を作成し，さらにその項目を社会集団に言及する言い回しに変えて，社会集団アタッチメント尺度（Social Group Attachment Scale，以下SGAS）を作成した（Smith, Murphy, & Coats, 1999）。

因子分析の結果，SGASの二次元性が確認された。またCollective Self -Esteem Scale（CSES; Luhtanen & Crocker, 1992）の下位尺度と相関を示すなど，併存的妥当性が確認された。また恋愛パートナーアタッチメント尺度との相関の低さなどから弁別的妥当性が確認された。

なお，このSGASには，グループ一般を問うものと，現在最も重要なグループを一つ選んでそれについて回答させるものの2種類がある。Smith et al.（1999）の研究では，それら2種類と恋愛パートナーアタッチメント尺度との相関を見たところ，グループ一般を問うものの方が最重要なものについて問うよりも相関が高かった。このことは，さまざまなアタッチメントのパターンを反映する多元的な精神モデルの存在の統計的な証左となると考えられている。

Marmarosh et al.（2006）は，このSGASを用いて集団精神療法家のグループアタッチメントスタイルを査定し，これらのスタイルが，患者が集団治療に対してどんなふうに思っているかという治療者の側の予想にどのように影響を与えるかを調べた（Marmarosh, Franz, Koloi, Majors, Rahimi, Somber, Swope, & Zimmer, 2006）。その結果，グループアタッチメント不安が高い治療者は，ネガティブな通説や誤解を患者が持っていると予想することと相関していた。一方，回避に関しては患者に関する予想に何の相関も見られなかった。このことから，治療者の持つ集団から拒否される恐れ（すなわちグループアタッチメント不安）が患者に投影されやすく，アタッチメント理論が集団精神療法場面にもある程度当てはまることを示している。

本研究の目的は，Smith et al.（1999）の「社会集団アタッチメント尺度」の日本語版を作成することである。その際，理論的に仮定されている「アタッチメント不安」と「回避」の2次元性を示すか，また他の尺度との相関があるかといった点を妥当性検討の主なポイントとする。

2．方法

2.1　調査対象者

東京都内の大学生の男女228名。そのうち，フェイスシートおよび社会集団の記入漏れがないこと，欠損値がないことを基準に選定を行い，有効回答と判断された172名（男性63名，女性109名）のデータを分析に用いた（有効回答率75%）。平均年齢は20.0歳（18～25歳，SD＝1.40）であった。

2.2　社会集団アタッチメント尺度日本語版作成過程

SGASの2種類のうち，ここでは，構成概念妥

当性や弁別的妥当性がより高かったことを考慮して，最も重要な集団を選択させるタイプのものを用いた。日本語版作成は以下の手順で行った。第1著者が英語・日本語バイリンガル1名と議論を行いながら，社会集団アタッチメント尺度の日本語版の素案を作成した。それを第2著者が心理学専門家7名，心理学専攻大学院生4名とグループでチェックして二言語間のニュアンスが一致するように修正した。その際，原文の“group”に「場所」と「人」の2種類の意味があることがわかり，文脈に応じて「その集団」と「その集団の人たち」とを訳し分けることにした。最後に，研究内容を知らない大学院生1名に実際に施行し，日本語らしさや文意の明示性を確認した。

2.3 質問紙

質問紙は，フェイスシート（学年，年齢，性別）と次の3つの尺度から構成された。

①社会集団アタッチメント尺度日本語版(SGAS-J)：上述の手順で作成された25項目を用いた。先行研究を参考に，「これから，あなたの社会集団とのつながり について考えていただきます。ここでいう社会集団とは，お互いに知っていてしょっちゅうやり取りしている人たちの集まりのことです。そのような社会集団の例としては，クラブ（部活動），サークル，スポーツチーム，などがあります（インターネット上でのつながりはここには含めません）。あなたにとって最も重要な社会集団を1つ選んで，下欄にその名前を記入してください。そして，あなたのその集団とのつながりについて どのように感じているのかに基づいて次の文章に答えてください。正しい答え，間違った答えはありません。あなたの個人的な反応や意見が大切です。各文章について，あなたの気持ちに最もあてはまる数字1つに○をつけてください。」という教示を与え，重要な社会集団1つに関して，7件法（1＝“全くあてはまらない”から7＝“非常によくあてはまる”）で回答を求めた。なお，逆転項目に関しては，7点から1点の並びを1点から7点に並べ替えて算出した。

②集団同一視尺度（GIS, Karasawa, 1991）：12項目，7件法。「所属する集団への同一視の程度を測定する尺度」と位置づけられている。青年から成人に至るまで広く適用可能とされ，実験研究を通した妥当性・信頼性の検証がなされている。先行研究に従い，「あなたと____との関係について次の質問に答えてください。最もよく当てはまる数字をそれぞれ1つずつ選び，○を囲んで下さい」と教示を与え，7件法（1＝“全くあてはまらない”から7＝“非常によくあてはまる”）にて回答を求める方式をとった。なお，教示文の“_____”には，SGAS-Jの教示の際に挙げた社会集団を入れて読むように指示文を加えた。

③愛着機能尺度（AFS，山口，2009）：愛着は不安や恐怖を低減させる性質を持つとされ，AFSはそういった愛着の機能を直接的に測定することを目的として作成されている。愛着機能とは「特定の愛着対象との相互作用における接近可能性や応答性に支えられた主観的な確信や期待」と定義されており，一般化された自他の表象である内的作業モデル（IWM）と区別される「関係特異的」なものとされる。尺度は15項目から構成されており，先行研究に従い，「以下の文章について，あなたがもっとも大切だと思っている人に対して，普段感じることとしてどの程度あてはまりますか。もっとも大切な人を一人だけ思い浮かべながら，以下の文章についてお答え下さい」という教示を与え，7件法（1＝“全くあてはまらない”から7＝“非常によくあてはまる”）で回答を求める方式をとった。今回のSGAS-Jの妥当性検討に際し，IWMにおける一般的な自他表象ではなく，関係特異的な愛着の機能的側面と弁別されるものであることを検証するため，本尺度を採用した。

3. 結果

3.1 SGAS-Jについて

SGAS-Jの25項目について項目ごとの平均値，標準偏差を確認した上で，Smith et al.（1999）にならい，主成分分析を行った。固有値が第1因子から7.33，2.35，1.37，1.02と推移していたこと，および解釈可能性を考慮して，2因子解が適当と判

断した。そこで，再度主成分分析で2因子を抽出し，Varimax回転を行った。項目の選定についても，先行研究にならい，解釈可能性および因子負荷量がいずれかの因子に対して.50以上であるという基準により行った。その結果，最終的には項目2，4，6，7，19を除く，20項目が選定された。2因子による累積説明率は48.40%であった（Table 1）。

第1因子は，21.「私がその集団の人たちを大切にしているほどには私は大切にされていないと心配することがある」，12.「その集団の人たちが私をいつでもメンバーとして求めるわけではないだろう，とよく心配 してしまう」などの項目で，集団から求められない不安を表すものであるため，先行研究と同様に「アタッチメント不安」と命名することが妥当であると考えられた。また，第2因子は，22.「その集団の人たちに頼ると心地よい」（逆転項目），23.「その集団は必要とする時にそばにあるだろうと私は信じている」（逆転項目）など，集団から距離を取ることに安心を感じることを表すものであるため，先行研究と同様に「アタッチメント回避」と命名することが妥当であると考えられた。

信頼性を検討するため，第1因子に.50以上の負荷量を持つ12項目の尺度値からα係数を算出したところ，$\alpha = .90$と高い値を得た。同様に，第2因子に.50以上の負荷量を持つ8項目の尺度値からα係数を算出したところ，$\alpha = .77$と十分に高い値を得た。それらの結果，「アタッチメント不安」と「回避」の各下位尺度は高い信頼性を示したと言える。

3.2 AFSとGISについて

AFSの各得点に対して，先行研究に従い，AFSの15項目について主因子法による因子分析を行った。固有値1以上を基準として抽出を行ったとこ

Table 1. SGAS-Jの因子分析結果（主成分分析・Varimax回転）

	I	II	共通性
F1：「アタッチメント不安」			
21. 私がその集団の人たちを大切にしているほどには私は大切にされていないと心配することがある。	.807	.047	.653
12. その集団の人たちが私をいつでもメンバーとして求めるわけではないだろう，とよく心配 してしまう。	.784	.153	.639
10. その集団の人たちが本当には私を受け入れてくれていない，とよく心配してしまう。	.770	.283	.673
17. その集団の人たちは私が近しくなりたいと思うほどには近づいてくれないと思う。	.739	.144	.567
18. その集団は必要な時はそばにあるといつもあてにしていいのか，私にはよくわからない。	.718	.152	.539
8. 私が完全な一体感を感じていたいと望むことで，その集団の人たちが遠ざかってしまうことがある。	.701	-.051	.494
15. その集団の人たちを完全に信頼するのは難しい。	.609	.461	.584
25. その集団の人たちに捨てられることを心配することはあまりない。*	.587	.055	.348
5. その集団の人たちと近しくなりすぎることを心配することはあまりない。*	.554	.392	.461
24. その集団の人たちと情緒的に近しくありたいが，完全に信頼したり頼ったりするのは難しい。	.552	.470	.526
14. その集団は，私が必要とする時に決してそばにない。	.515	.426	.446
16. 一人になったり，その集団の人たちに受け入れられなかったりすることを心配することはない。*	.510	-.005	.260
F2：「アタッチメント回避」			
22. その集団の人たちに頼ると心地よい。*	.162	.684	.494
23. その集団は必要とする時にそばにあるだろうと私は信じている。*	.290	.628	.479
20. その集団の人たちが私を頼ると心地よい。*	-.276	.619	.459
11. その集団の人たちと近しくないことが心地よい。	.144	.612	.395
3. その集団と完全な一体感を感じていたい。*	-.157	.594	.377
13. その集団の人たちと近しいとやや居心地が悪い。	.414	.554	.479
1. その集団の人たちに頼ることが難しい。	.482	.526	.509
9. その集団の人たちに頼ることも，その人たちが私に頼ることも好まない。	.157	.524	.299
因子の寄与	5.924	3.755	
因子寄与率 (%)	29.622	48.396	

*は逆転項目を示す

ろ，先行研究と同様に3因子の抽出が妥当と考えられた。なお初期の3因子解における分散説明率は，69.83%であった。そして，抽出された3因子についてPromax回転による因子分析を行い，それぞれの因子1つに対して.50以上の負荷量を示していることを条件に項目の選定を行った結果，先行研究と同様にすべての項目が各因子に十分な負荷量を示していたことから，15項目すべてが選定された。その結果から，先行研究と同様に第1因子を「安全な避難所」，第2因子を「安全基地」，第3因子を「近接性の維持」と命名した。因子間相関もすべての因子間において十分な正の相関が示された（Table 2）。また，信頼性を検討するため，それらの尺度値およびAFS全体のα係数を算出した。結果，「安全な避難所」下位尺度（5項目）は$\alpha = .91$，「安全基地」下位尺度（5項目）は$\alpha = .89$，「近接性の維持」下位尺度（5項目）は$\alpha = .84$と，いずれも高い信頼性を示した。

またGISは$\alpha = .87$で，これも高い信頼性を示した。SGAS-J，AFSの下位尺度，およびGISの得点の平均値，標準偏差，α係数をTable 3に示す。

Table 3. 各尺度の平均（M），標準偏差（SD），α係数

	M	SD	α
アタッチメント不安	41.02	13.22	.90
アタッチメント回避	24.38	7.06	.77
集団同一視	58.69	10.90	.87
安全な避難場所	22.98	6.63	.91
安全基地	27.18	5.48	.89
近接性の維持	26.79	5.27	.84

3.3 尺度間の相関について

次に，SGAS-Jの下位尺度得点と，GIS総得点およびAFSの下位尺度得点との相関係数を算出した（Table 4）。その結果，SGAS-Jの「アタッチメント不安」下位尺度得点とGIS総得点との間には有意な負の相関が示された（$r = -.31$, $p<.001$）。また，「アタッチメント回避」下位尺度得点とGIS総得点との間にも有意な負の相関が示された（$r = -.62$, $p<.001$）。一方，SAGS-Jの2つの下位尺度得点と

Table 2. AFSの因子分析結果（主因子法・Promax回転）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
F1：「安全な避難場所」			
11. その人は，私が辛い時にはきっと一緒にいてくれるだろう。	.901	-.126	.077
9. 疲れているときや病気の時には，その人は私と一緒にいて助けてくれるだろう。	.874	-.097	.030
8. とても落ち込んでいる時，その人はきっとそばにいて慰めてくれるだろう。	.870	-.020	-.001
4. 私が不安なとき，いつでもその人は私と一緒にいて安心させてくれるだろう。	.808	.064	-.021
6. その人は，いつでも私の気持ちに応えてくれるだろう。	.698	.199	-.159
F2：「安全基地」			
7. その人が私の力になってくれると思うと，私にとって少し難しいことでも挑戦できるように思う。	-.062	.847	.073
1. その人が励ましてくれると思うと，少しは自信を持って何かに取り組むことができる。	.033	.824	-.101
14. その人が支えてくれると思うので，頑張ることができるように思う。	-.117	.807	.113
15. その人が力になって支えてくれると思うと，何でもできるような気がする。	-.011	.756	-.048
3. その人が実際にそばにいなくても，きっと励ましてくれると思うだけで少しは頑張れるように思う。	.201	.657	.038
F3：「近接性の維持」			
13. 私が辛い時には，その人と一緒にいてもらいたいと思う。	-.072	.024	.850
5. とても落ち込んでいる時，その人にそばにいて慰めてもらいたいと思う。	.104	.122	-.751
10. 困ったには，その人に助けてもらいたいと思う。	.122	.103	.654
2. 疲れているときや病気の時には，その人に一緒にいて助けてもらいたいと思う。	.066	.120	.582
12. 不安で心細い時でも，その人と一緒にいたいとは思わない。	.112	.109	.533

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	—		
Ⅱ	.495	—	
Ⅲ	.489	.678	—

AFSの下位尺度得点との間には，ほとんど相関がなかったが，SGAS-Jの第2因子「アタッチメント回避」下位尺度得点とAFSの第2因子「安全基地」の下位尺度得点の間にのみ有意な負の相関が示された（$r=-.21$，$p<.001$）。

4．考察

4.1　SGAS-Jの因子分析について

SGAS（原版）は，直交する2次元でアタッチメントの「不安」と「回避」の因子構造を示した。本研究での因子分析によって検討しようとしたことは，日本語版においても同様の構造を持つと言えるかどうか，という点であった。Varimax回転の結果を検討した際に，2因子のどちらにも負荷量が高い（.40以上の）項目を含むものをあえて数項目残したのは，Smith et al.（1999）の理論仮説と方法をわれわれが尊重したためである。すなわち，彼らは項目選定の際にどちらかの因子に.50以上の負荷量があるものとして，両因子に負荷量の高いものを残しつつ，類型の判別の道具を作成するよりも2次元性の意義を強調した。今回はその方法を踏襲し，できるだけ原版の構造を維持しようとした。その意味で，いくつかの項目の負荷量の点で改良の余地を残すと思われるものの，「アタッチメント不安」と「アタッチメント回避」を表す下位尺度群が構成され，社会集団に対するアタッチメントをその2軸でとらえられることを示唆するものであった点に意義があったと考えられる。

4.2　SGAS-Jの妥当性・信頼性について

SGAS-Jは，Smith et al.の結果とは多少項目の異同がありながらも，下位尺度において十分な信頼性が示された。また，SGAS-Jの総得点および下位尺度とGIS総得点との間には有意な負の相関が示されたことは，「アタッチメント不安」や「アタッチメント回避」が低い者ほどその集団に強く同一化していることを意味し，併存的妥当性が示された。本尺度は，グループメンバーとしての自分自身のモデルや，それとともに，グループの一員であることについての考え，情緒，行動に影響を与えるグループのモデルを測定しているものと考えられる。これは先行研究（Smith et al., 1999; Collins & Read, 1994; Baldwin et al., 1996）の理論的な位置づけと一致するものである。また，SGAS-JとAFSとの相関からは，弁別的妥当性が示されたと言える。すなわちSGASが恋愛パートナーアタッチメント尺度との相関の低さなどから弁別的妥当性が確認されたのと同様に，SGAS-Jも特定の個人に対する関係特異的なアタッチメントとは区別されうるものであると言える。SGAS-Jの「アタッチメント回避」下位尺度とAFSの「安全基地」下位尺度に有意な弱い負の相関がみられた。「安全基地」は「個人が困難な状況や課題に直面した際に，親密な関係性で得られる安全感を利用していることを示唆している」ものとされる（山口，2009）。「アタッチメント回避」の逆転項目（例えば22「その集団の人たちに頼ると心地よい」）とは類似しており，負の相関は理解できるものである。すなわち危機状態の時には親密な他者と重要な集団は類似の働きをするということである。しかし，それらの相関は高いものではなく，弁別性という点では十分あると思われるが，今後も検討を続けたい。

Table 4. 各尺度間における相関係数

	アタッチメント不安	アタッチメント回避	集団同一視	安全な避難場所	安全基地	近接性の維持
アタッチメント不安	—	—	—	—	—	—
アタッチメント回避	-.52 **	—	—	—	—	—
集団同一視	-.31 **	-.62 **	—	—	—	—
安全な避難場所	-.06	-.15	.24 **	—	—	—
安全基地	-.05	-.21 **	.19 *	.46 **	—	—
近接性の維持	.08	-.12	.15 *	.46 **	.63 **	—

** p<.01, * p<.05

4.3　今後の課題

上述の通り，本研究で作成されたSGAS-Jは，社会集団へのアタッチメントの２次元性を検証するものであり，一部の項目を修正することでより精度を高められる余地がある。本研究は大学生の社会集団を扱ったもので，「サークル」，「大学」，「仲間集団」といったものが多かった。それらの集団は社会における位置づけ，目的，枠づけの異なるものであり，最も重要な集団として選択したものの違いによってアタッチメントのあり方に違いがあるのかといった点は興味ある問いであろう。また，成人や思春期以前の場合はどうなのか，といった問いも生じてくる。臨床的には，重要な集団が持てない場合への考慮，その意味の検討を行う必要があろう。

集団一般，あるいは集団精神療法領域におけるアタッチメント理論の実証研究はまだその途についたばかりであり，測定用具の開発が求められている。このような尺度は将来，患者のグループアタッチメントのあり方がどのように治療過程に影響を与えるのか，それが集団治療の中でどのように変化していくのかといった問いを検討するのに有益な道具となると期待される。

引用文献

Ainsworth, M., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Baldwin, M. W., Keelan, J. P. Rl, Fehr, B., Enns, V., & Koh-Rangarajoo, E. (1996). Social cognitive conceptualization of attachment styles: Availability and accessibility effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 94-109.

Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.

Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.

Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss: Vol. 3. Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books.

Bowlby, J. (1982). *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment (2nd ed.)*. New York: Basic Books.

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: an integrative overview. In J. A. Simpson & W. F. Rhodes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 46-76). New York: Guilford Press.

Collins, N. L. & Read, S. J. (1990). Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 644-663.

Collins, N. L. & Read, S. J. (1994). Cognitive representations of attachment: The structure and function of working models. *Advances in Personal Relationships*, 5, 53-90.

Fraly, R. C. & Waller, N. G. (1998). Adult attachment patterns: A test of the typological model. In J. A. Simpson & W. F. Rhodes (eds.), *Attachment theory and close relationship* (pp. 78-114). New York: Guilford Press.

Hazan, Cl, & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.

Karasawa, M. (1991). Toward and assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.

小谷英文（2008）．ニューサイコセラピィーグローバル社会における安全空間の創成 風行社

Main, M. & Goldwyn, R. (1984). Predicting rejection of her infant from mother's representation of her own experience: Implications for the abused-abusing intergenerational cycle. *Child Abuse and Neglect*, 8, 203-217.

Main, M. & Solomon, J. (1990). Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years* (pp. 161-182). Chicago: University of Chicago Press.

Marmorosh, C. L., Franz, V. A., Koloi, M., Majors, R. C., Rahimi, A. M., Ronguillo, J. G., Swope, J. S., & Zimmer, K. (2006). Therapists' group attachments and their expectations of patients' attitudes about group therapy. *International Journal of Group Psychotherapy*, 56 (3), 325-338.

Meyer, B. & Pilkonis, P. A. (2002). Attachment style. In J. Norcross (Ed.) Psychotherapy relationships that work – Therapist contributions and responsiveness to patients. New York: Oxford University Press.

Norcross, J. (Ed.) (2002). Psychotherapy relationships that work – Therapist contributions and responsiveness to patients. New York: Oxford University Press.

Rom, E., & Mikukincer, M. (2003). Attachment

theory and group processes: The association between attachment style and group-related representations, goal, memories, and functioning. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 1220-1235.
Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S. (1992). Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 434-446.
Smith, E. R., Murphy, J., & Coats, S. (1999). Attachment to groups: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 94-110.
詫摩武俊・戸田弘二.（1987）. 愛着理論から見た青年の対人態度：成人愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
山口正寛.（2009）. 愛着機能尺度（Attachment Function Scale）作成の試み パーソナリティ研究, **17**（2）, 157-167.

参考文献

数井みゆき・遠藤利彦（編）（2005）. アタッチメント：生涯にわたる絆　ミネルヴァ書房
数井みゆき・遠藤利彦（編）（2007）. アタッチメントと臨床領域　ミネルヴァ書房

注

1　attachmentはこれまで「愛着」と訳されることが多かった。しかし日本語の「愛着」には,「愛着のある品」というような「思い入れ」のニュアンスを伴うため,「近接性を維持する」という原義との混同を招く恐れがある。そのため, 数井・遠藤（2005, 2007）にならって「アタッチメント」を用いることにする。